理科を通じた学校と家庭、地域との交流。教科通信がその橋渡し役に

●安城市立篠目中学校　石原茂樹先生

――受賞の率直なお気持ちをお知らせください。

はじめに、お聞きしたときには本当に驚きました。日刊で出されている先生が多い中で、この「サイエンス」は週刊。過去の経験で日刊の大変さを知っているので、まさか、私が選ばれるはずがないと思っていました。これも多くの皆さんの支援のたまものと感謝しています。

――発行の動機について教えてください。

2年生の選択理科は週に1回だけ。どうしても生徒は前の授業の内容を忘れがちになります。授業の復習にもなる教科通信が必要ではと思い、発行することにしました。授業のはじめに、まずは生徒に読ませています。

――通信の役割・意義についてどのように考えていますか。

通信は、学校と生徒だけではなく、家庭や地域とのコミュニケーションにも欠かせないものです。私のモットーは「地域の人材に学び、学びを地域に返す」こと。授業でも、地域の自動車産業を支えてこられた元技術者など、さまざまな人材を社会人講師として何度か招き、生きた理科を子どもたちに教えています。その学んだ成果を、毎週「サイエンス」を通じて、家庭にもお届けすることができたと思います。学校・学級通信に限らず、あらゆる通信には学校と家庭・地域の橋渡しをする役割があると日々実感しています。

――保護者や地域の方々の反響も大きかったようですね。

一番うれしかった反応は、「サイエンスのおかげで、父親と子どもの会話が弾むようになった」ということです。当校は父親が製造業に従事する生徒が多く、科学技術や理科に関心が高い土地柄です。通信を父子で読みながら、父親が息子に仕事の話をするというケースも出てきているようです。どうしても中学生になると、父親との関係が希薄になる傾向がありますが、通信を通じて父親の存在感を強くすることができたとしたら、こんなに喜ばしいことはないですね。

――レイアウトや文章などで工夫している点はありますか。

私自身、地元の新聞社で行う講習会にも参加して、新聞づくりのスキルを学んでいます。特に重視しているのは、レイアウトと見出し。ぱっと見て分かるような記事のレイアウトはもちろん、読者の気持ちを引く見出しの入れ方にも頭を絞っています。駅売りの夕刊紙もたまに買って、見出しやタイトルの入れ方を参考にしているんです。

■制作データ■

- 紙面のサイズ　A４
- 毎号のページ数　１ページ
- カラー印刷（一部モノクロ）
- 発行部数　30 部
- 発行間隔　週１回（選択理科の授業日）
- 配布対象　生徒及び保護者